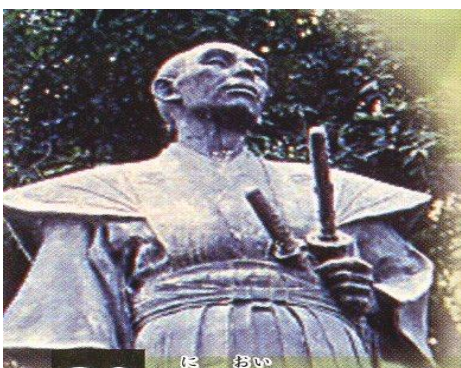


横井小楠 —その業績と生涯—



慶応2年(1866)4月、横井小楠の甥左平太・大平*兄弟が米国留学のため、長崎から船出しました。小楠はその出発に当たって、2人にはなむけの言葉を与えています。それは「堯舜孔子の道」の書き出しではじまる『送別の語』です。

20 二甥の渡米と『送別の語』

小楠は、将来の状況を見越して、亡くなった兄時明の子である左平太・大平を国家のために役立つ有用な人材に育て、西洋のことを実地に学ぶことを勧めたいと心に決めていました。そこで、元治元年(1864)、四時軒を訪れた坂本龍馬を介して勝海舟に2人を預け、神戸の海軍操練所に入所させたのです。しかし、翌年の慶応元年(1865)に海軍操練所が閉鎖されたため、2人は長崎に移り、長崎語学校に通ってフルベッキ*から指導を受けました。左平太と大平は語学(英語)の研究に励むうち米国留学を志し、翌年4月、渡米が実現しました。甥の左平太22歳・大平17歳、そして小楠が58歳の時です。

この時、小楠は『送別の語』を2人に与えました。これを要約すると、「これからの日本は、古代中国の聖天子といわれる堯・舜・孔子が行った道徳的政治を基本に据えて、西洋の科学的文明を積極的に取り入れなければならない。そして、ただ単に富国強兵で終わるのではなく、日本が先頭に立って正義人道を世界に広め、真の世界平和を作らねばならない。」と強調しています。特に前半の語句は、小楠の理想と信念を簡潔に表わしたものと云えます。なお、後半の語句は2人の修養に関する内容です。

ところで、米国に留学するためには学資と渡航費用などが必要です。これらの資金集めについては門人が積極的に関わっています。

『送別の語』 慶応二年(一八六六)
堯舜孔子の道を明らかにし
西洋器械の術を盡くす
何ぞ富国に止まらん
何ぞ強兵に止まらん
大義を四海に布かんのみ
心に逆らふこと有るも人を尤むること勿れ
人を尤むれば徳を損す
為さんと欲する所有るも心に正にする勿れ
心に正にするば事を破る
君子の道は身を脩むるに在り

「旅費と学費は、門人と云ふ中にも輩北の徳富兄弟*が父太善次を説いて貯蔵の古金や山を売って弁じました。」(徳富蘆花著『竹崎順子』)とあり、長崎滞在中の門人たちも別途に旅費を調達しています。さらに、当時の海外出国*は国禁でしたので、乗組員(水夫)として便船によって渡航することにしました。そのため幾度も船長と交渉し、やっと志が通じて乗船できました。2人は半年後にはニューヨークに着きましたが、着米後の身の振り方についてはフルベッキが親身になり米国の友人への紹介状も書いてくれました。

2人は航海学校などに入学し、学業に実地訓練に意欲的に取り組みましたが、明治2年(1869)末に病気にかかった大平は単身帰国しました。帰国後の大平は、洋学校設立と外人教師招聘のために奔走し、ジェーンズ*を洋学校教師として招くことができたが、それを見ずして亡くなりました。

*左平太(1845~75)・大平(1850~71)…父は小楠の兄時明、母はきよ。左平太は明治5年(1872)帰国するが、再渡米し、政治・法律を学ぶ。同8年帰国し元老院権少書記官となる。

*フルベッキ(1830~98)…オランダに生まれ、米国に移住して宣教師となる。安政6年(1859)来日して長崎に住み、佐賀藩の学校などで教える。明治2年上京し明治政府顧問格となる。

*徳富兄弟…徳富太善次の男子に一敬・一義・高廉・昌龍が居た。

*海外出国…当時は国禁のため左平太は伊勢佐太郎、大平は沼川三郎と変名して渡米したが、出帆後間もなく、幕府は学術修業や商業目的の海外渡航を許可している。

*ジェーンズ(1837~1909)…米国陸軍大尉。明治4年(1871)8月、家族と共に来熊し、同年9月に熊本城古城に開校した熊本洋学校の教師となる。同9年任期を終え、離熊。当時の洋学校教師館は現在熊本市水前寺公園にある。

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。